

## 第二十一話 テ・デウム！

それは、昭和二十一年五月のことでした。インドネシアの原住民カトリック信徒の司牧という任務の委嘱を受けて、昭和十九年の末から約一年半を過ごしたセレベス島におさらばを告げて、私は、二千人にも余る他の日本人と共に、リバティ型の輸送船に身を託して一路故国へ向かいしました。私を迎えた日本、終戦後まだ一年を経っていない日本の姿はきびしいものでした。至る所に焼跡が残り、道行く人の面にも疲労とみじめさがにじみ出ている敗戦国日本でした。まだ爆撃の洗礼の始まらなかった日本を去った私には、一年半振りに見る祖国の姿は、私の想像をはるかに上まわったものでした。

ところで、私は上陸後、直ちに、大阪のカトリック司教館に帰国の挨拶をすませますと、取るものも取りあえず、私が日本を出るまで、主任司祭として働いていました大阪市の川口の教会の焼跡を訪れてみました。

その焼跡の、むざんな廃墟の真中に、私はしばらくは物も言えず、ただぼうぜんと立ちつくしました。憲兵や特高の白眼の中に、それでもなんとかかとか、信者の信仰を守り抜こうとして悪戦苦闘したなつかしい思い出の場所も、今はただ、そのあたり一面、目もあてられぬ焼野原と化していたのです。だが、私の胸の奥底から、つき上げるように、慟哭の鳴咽がもれ出ようとした、そのとたんです。私の脳裏に、突然、一つのありさまが、なぜか不思議に、はっきりと、色もあざやかに浮かび上がって来ました。その時は、確かに強烈な印象を受けたに違いないのですが、なぜか今まで忘れるともなく、私の記憶の底に薄らいでいた一つの光景が、突如として、他のすべての記憶を押しつけて、表面に突進して来たといった感じで、私は、驚いてその思い出された記憶に、はっきりと目を向けました。

それは、終戦直後のセレベスのできごとです。南方はるかな孤島にあって、祖国の敗戦の報に接した私の心は、人間として苦悩しました。私自身が生きては帰れぬかも知れぬという不安より、私の心を占めた思いは、やはり、祖国日本になわねばならぬ暗い不吉な将来の宿命に対する不安でありました。意識したつもりはありませんが、私はやはり暗く沈んでいたのでしょうね。原住民の信者たちが、次々に私を訪れては拙いながらに心のこもった慰めの言葉をかけてくれるのですが、そういうある日のこと、ひとりの青年が勢よく飛び込んで来るなり、私に申しました。



「オランダ人神父様からのことずてです。『あした三時から学校の大ホールで戦勝感謝式がありますから、小林神父様にもぜひ出席してください。』ということですよ。ね、神父様、あしたは一緒に行きましょうね。」

私は驚いて青年の顔を見ました。

「なんということだ。まるで楽しいお芝居にでも出かけるように嬉々として、敗戦国民の私を戦勝感謝祭に誘いに来るのか。この男、少し頭が足りないんじゃないかな。」

私が頭の中でこんなことを考えている間も、その青年は、私が「ウン」と言うまでは、なん回でも性懲りもなく、しつこく、同じことを繰り返しているのです。私は少しめんどくさくなつて、

「うん、行くよ。」

と答えました。

翌日、私は重い腰を上げました。そして、その青年と一緒に出かけました。さしもの大講堂も立錫の余地がありませんでした。

「神父様、一番前に神父様の席が取ってありますから、前の方へ行きましょう。」

と、うるさくすすめる青年の手を振り切って、私はそと一番最後列の椅子の一つに、小さく席

を取りました。やがて、オランダ人司教の司式のもとに、聖体降福式というカトリックの宗教儀式が始まりました。私はひざまずいて、ただ無感動に目を閉じていました。式の半ばに会場がざわめき、参会者全部が起立しました。そして、カトリックの感謝式には必ず歌われる感謝の歌、テ・デウム（神よ、我ら御身をたたえん）というラテン語の聖歌が、司教の先唱に続いて、轟然と、実に耳も聳せんばかりに轟然と全会衆によって、いっせいに高らかに歌われ始めました。

私はそっと目をあけて、周囲を見まわしました。ほとんどすべてが私の知っている顔です。私を、ひとりの神父として、いわば彼らの霊的父として心からの愛情と尊敬とを示してくれた愛する信徒たちです。その信徒たちが、今、我を忘れての恍惚の中に、

「テ・デウム、ラウドゥス・テ・ドミヌム・コンフィテムル（神よ、我ら御身をたたえ、御身をと、声を限りに歌いに歌っているのです。そこには、日本もなければ、オランダもなかった。あるものは、ただ人類の間に戦いと憎しみが終わりを告げたことに對する、神への心からなる感謝と法悦だけなのです。」

そうだ。敗戦国の日本人といえども、この大きな喜びを神に感謝して悪いはずがあるだろうか……私は、今にして、私をむりやりここに引張って来たインドネシアの青年の深い心情に触れた



ような気がしました。私は自分の愚かさを悔いて頭をたれました。が、次に私が我に返ったとき、私は、自分もまた、声を限りに神への感謝を歌っている私自身を発見したのです。私は、両の目から溢れる滂沱たる涙を拭おうともせず、隣りの青年を振り返りました。青年は私の顔を見て、にっこりほおえみましたが、ふと、私の涙に気がつく、みるみる青年のまぶたにも涙があふれ出てくるのを私は見たのです。そして、ふたりは肩を並べ声を合わせて、長い感謝の歌を歌い続けたのでした。

……私は、ふと、我に返りました。今、私が立っているのは、常夏の国インドネシアではなく、日本の大阪の焼野原の真中でした。だが、私の耳には、まだまざまざと、あのテ・デウムが余韻を引いて鳴り響いていました。私は静かに、しかし、はっきりとした確信をもって、つぶやきました。

「そうだ。これでいいのだ！」と。

皆様、その時から早くも、十二年の年月がたちました。そして、今、敗戦の傷痕もいえ、国民の生活水準も戦前を上まわるまでに復興した今日、私は、かつての十二年前の五月、大阪川口の焼跡に立った時のことをしみじみと、なつかしく思い出すのです。と言っても誤解しないでいただきたいのですが、それはすでに、過ぎ去った苦しみや悲しみを、過去のこととしてなつかしく

思い出すという意味ではありません。むしろその反対に、私は、あの時のことを、なつかしく、できたら、もう一度、あの時に帰りたいと思うのです。あの当時、生活はお互いに苦しいことでしたね。そして、戦前は想像もできなかったような思まわしい犯罪が行なわれ始めて、私たちの眉をひそめさせましたね。けれども、私は信じていたのです。これは敗戦という古今未曾有の試煉を受けた日本のいわば虚脱状態なのだ。だが、この虚脱状態から脱け出したときにこそ、聡明な日本国民は、きつとこの敗戦という試煉が与える大きな教訓を見出し、これに違いない。明治の開化以来、ただ、欧米先進国の表面のみを見ならい、ただ物質文明の面だけを追いすぎ、あまりに物質主義の日本ではあったけれども、その物質主義日本のつづれ去ったこの廃墟の中から、今度こそ日本は、神をおそれる道義日本としての新しい誕生を、第二の建国の姿を見せてくれるに違いないと、私は信じたのです。そう信じた時、私はうれしかった。そして、私は、大阪の焼野原でひとりそとテ・デウムを、……あの「感謝の歌」を口ずさみ、神に感謝を捧げたのでした。

皆様、その時から十二年という歳月が流れ去りました。そして、日本は……？ 世界に燦として輝くはずの道義国家日本の新しい建国の姿は……？ ああ、それは私の甘いロマンティックな一場の夢にすぎなかったのでしょうか？



やせがまんを張るのをやめて、父の家に帰るべき時が来たのではないのでしょうか？

私は、いつか、この放送で、人類が知らねばならぬたった一つのことを知ろうとしない限り、人類の知恵は、もうこれ以上進歩してはいけないのだ、と申したことをご記憶でしょうか？ 神への信仰によって裏付けされない科学の進歩は、いつも、人類の破滅という無気味な毒を内に宿しています。狂人に刃物を持たせたような、一触即発の危険から人類を救いたいと思うなら、人類は、も一度、神を見い出さねばならないのです。

皆様、「神」という言葉はただ一語……しかし、その中に全宇宙の秩序と美と、そして、全人類の心と愛と、そして、あなたと私のひとりひとりのしあわせを含むこの一語、無限の厚みと深さと奥行を持つこの一語を、心して静かに、謙虚に口ずさみましょう。「おお、神よ！」と。そして、も一度人間の尊厳を取りもどそうではありませんか？

ではきょうは、これでお別れします。また来週この時間に。

さようなら。

けれど皆様、それは決して日本だけの責任ではないのですね。人類が神を見失ってから数世紀を経ました。科学の進歩に眩惑されて傲慢になった人類は、神なしでやって行けると信じました。そして、宗教のかわりに新しい時代の脚光を浴びた旗印として近代的ヒューマニズムを、その中に、博愛主義と自由と平等という文字を大きく染め抜いて掲げました。

まだ神への信仰の余燼がくすぶっていた間は、なんとか持ちこたえたようです。第一次欧州大戦における毒ガスの悲惨が、将来の戦争においては毒ガスを使用しないという協定を結ばせるまでに、人類はまだ幾分人間の良識を持ち合わせていました。しかし、それから三十年を経ぬうちに、人類の精神的な貧しさは、急ピッチに深まりました。あの、恐ろしい原子爆弾が広島に空に炸裂した時こそ、人間の良識が完全に破産を宣告された人類史上実に記念すべき瞬間だったのです。それから更に十年、今や、宗教に与えられない人間の良識……神への信仰によって一つに結ばれない人間の相互信頼も、どうやらどん底に辿り着いたようだ……とお思いにはなりませんか？

人間は、ここ数世紀にわたって、充分に人間の自力を試みてみました。そして、無限なるものの、永遠なるものへの結びつきを自ら絶ち切ったとき、人間というものが精神的に、道義的に、どれほど貧しくなるものかを身をもって体験しました。もう、よいかげんに人類の放蕩生活に